

第二期 第六十四号 (初版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2021. 11. 20 定有堂書店 発行

これまでの本屋、これからの本屋

個人店ってなんだっけ日記

汽水のほとりから (8)

悪魔との付き合い方

予約待ち 1人

映画と短編をめぐって

バイオームを意識して ノマド③④

八代日記 (二十)

影が薄くなる話

鳥取あれこれ その六十三

生 ではなく傳へられなひ…

本を読むのは孤独でしょうか

柘榴 放哉さんとくだもの続き

独り言オノマトペ。

… 編集後記

奈良 敏行

鳥居 貴彦

小原 修治

萩原 俊郎

森本 龍哉

松田 裕史

芝野 浩貴

齊藤 仁昭

ムラカミヒロミ

内田 克彦

秦阜 梅林

三浦 永理

あきの素生

ドラマリア

「これまでの本屋、これからの本屋」

奈良 敏行

(定有堂 店主)

十月十九日に雑誌『てんとう虫11号』が届いた。特集が「町本屋へ出かけよう」だった。町本屋、聞き慣れないことばだ。巻頭の第一特集は「町の本屋さんのいま」というテーマで永江朗さんが執筆している。書店特集は関心が薄くほとんど目を通さないのだが、永江さんの観察眼には学ぶものがあり、ていねいに読んだ。『菊池くんの本屋』以来、核心に行き届いて語るひとで、注目している。

掲載の順序でいうと、「Title」「ブックスキューブリック」「定有堂書店」「往来堂書店」「Reading Writing BOOKSTORE」「誠光社」だった。ここ二十年で本屋は半分に減って残り一万店くらいらしい。そんなあげくの「町の本屋」を一望している。

定有堂のファサードフォトには撮影者としてわたしの名前が記されている。依頼されて撮ったのだが、「町の中にあるという風景が欲しい」という編集者の注文だった。少

し考えた。「街の本屋」と言いつづけてきたが、最近では「街角の本屋」もいいなど、少し気が変わりはじめていた。考えて撮った写真は、はじめてのアングルだった。定有堂はいつも駅から歩いて八分、商店街の中ほどという案内でなされてきた。この度の写真は、狭く車一台の広さしかない横の通り、「初音通り」の出口にある本屋という風景を強調した。狭い路地の角にある本屋なのだ。特集テーマに沿ったとてもいい写真だということで、グラビアに使いたいという申し出もあったが、撮り直してもわたしのカメラでは残念ながら拡大印刷するには解像度が低かった。でもこのできごとでわたしの意識はちよつとだけ変わった。

永江さんの意図は、生き残った本屋、そして置かれた場所での必然的な個性の実現という視点だった。永江さんは本屋としてのシヨップを語り続けてきたひとだ。でもシヨップとしての本屋は壊滅寸前だ。「これまでの本屋」の記憶をコンパクトにまとめた永江さんの結論が、ここにあると感じた。

「これからの本屋」というとき、わたしは京都の「開風社 待賢ブックセンター」の鳥居貴彦さんのことを、真つ先に思い浮かべる。しかし、ここには登場していなかった。鳥居さんの本屋のことを語るのには難しい。まだきちんと語れる人を知らない。

先日、六十代半ばを過ぎて本屋を始めるといふ人と語り合った。六十過ぎて鳥取に帰省された人だ。二年ほど前から一箱古本市に出店され、際だった良書を出品されていて記憶に残った。開業の計画を聞かせてもらった。きっと成功されると感じた。研究され尽くされていた。年明け早々に開業される段取りもできあがっていた。でも考えている方向が少し気になった。研究されていたのは「これまでの本屋」だったからだ。わたしは「これからの本屋」は鳥居さんの本屋だと力説した。しばらくして、開業の時期を延ばすと便りがあった。でもやはり「これまでの本屋」を追求されるだろうと寂しく思った。

鳥居さんに、本屋を始めるときどう考えるべきか質問した。「開業のとき、本は十冊くらい並んでも、それでいいんじゃない」というのが返事だった。これこそがわたしの鳥居さんとわくわくした。むかし本屋全体の行き詰まりをいち早く読み取った柴田信（岩波ブックセンター）さんが、これからの本屋として、「普通の本屋」構想を語った。この真意は誰にも届かなかった。本屋が楽しいということと、本屋で生計をたてるといふことがどうしても両立しなくなるだろうという危機意識だった。具体的な解決策は、年金をもらえる人たちが集まって、本屋を営むことだった。鳥居さんは若いので年金は遠い先のことと考えても

いないだろうが、まさに「これからの本屋」のセンターを歩んでいる人に違いない。

十年限定で余生の本屋を営む。とりあえず本は十冊も並んでいれればいい。本は売れなくても、人は途絶えることなく訪れる。本屋的人間という言葉が好きだ。「いのち」を使い切る、その手立てとして「本」しか思いつかない人間のことだ。生活は簡単なほうがいい。わたしにはできなかったが、鳥居さんにはそれができている。そんな「これからの本屋」を語ることでできる人の登場を待ち望んでいる。

2021. 10. 19

2

定有堂教室「読む会」 (岩田直樹氏 選書)

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示

太極拳教室 (会場 定有堂二階 葉香クラブ (荷葉))
毎週 水曜 十九時半から ・ 土曜 十三時半から
講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

(参考)

『てんとう虫11月号』 クレディセゾン 2021

永江朗 『菊地君の本屋』 アルメディア 1994

個人店ってなんだっけ日記

鳥居 貴彦

(開風社待賢ブックセンター)

九州から知らない大学生がやってきた。荷物を土間にどさつと置いて「岡山の本屋さんで聞いてきました」という西に行くなら京都の本屋に行きなさいと言われたそうなので青春十八切符で鈍行を乗り継いでやってきたらしい。何か旅の目的みたいなことをごちゃごちゃ言っているが聞き流して、岡山のOさんの顔を思い出している。元気にやってはるんかなあ。手紙を受け取ったような気分。手紙と呼ぶには大きすぎるし喋りすぎなんやけど。不意に大学生が「不安になったりしませんか」と言った。それはないなあ、と答えながら昨日の売り上げを思い返す。雨の水曜日。緊急事態の世の中。静かやったなあ。でも不安かと言われるとそうでもないねなあ。

先日、銀閣寺の乙堂によつたらいつもめっちゃめっちゃ元気な店主のZさんが「人が来おへんしまじいよなあ」と嘆いていた。自分で雑誌を作ることにしたらしい。近所で割烹やつてるUさんも「お酒出せへんかったらなんともならん」とため息をついている。お店を改装することにしたらしい。喫茶店のTさんは半月くらいお店休むんやって。もつとひっそりできる路地奥の物件探してるみたい。

九州の大学生はまだいる。「おもしろい本屋さん教えてください」とか言う。そうねえ、と思いつく関西の本屋をあげてみた。線路を書いて、点を打っていく。スタンプラリーっぽいな、と思ったのでハンコを押すところを作った。奈良、彦根、神戸、大阪。ついでにちよつと足を伸ばして鳥取も。めっちゃくちやよくばつて名古屋とかも。最後のお店でなんかいいこと起こるかも、ということにした。わかってくれる人たちばかり。知らんけど。

四条通りの藤井大丸の地下で古本市をすることになった。中古のレコード市が盛況やったから古本も、と言う話らしい。話を持ってきたのはAさん。誰呼んだらおもしろいかなあ、とリストアップした表を見ながらぶつぶつ言っているとNさんが「やさしい本屋さんが少ないねえ」と言

う。そんな怖い本屋さんばかりかな、と思つたら品揃えのことだった。古本屋には、とがった本屋とやさしい本屋があるらしい。やさしい本屋どこですかね、と聞くとすぐに二、三軒の名前をあげるNさん。すつすつと出店者が決まっていく。ワゴンの配置はKさんが決めた。店番のシフトはNさんがつくる。チラシはSさんが配る。いろいろ自動的に進んでいく。

水無瀬の河原で立ったままHさんと話す。ワクチンどうするかねえ。川面をカモの群れがすーっと流れていく。だいぶ遅れてもう一匹がついていく。「あんな感じやな」とHさんが言った。そうやな。考えてるつもりやけどただ停滞しているだけなんやろうなあ。

あんまり独りでやってる気がしてないのかもしれないねえ。他の人が何してるか、すぐにわかる場所にいるし。誰かが工夫してやってたら、それいいなあ、と思う。遠くの本屋さんが雑誌に寄稿した記事を読んで、そやなあ、と思う。みんな本屋をやっている。自分はなにもしていないけど、少なくとも本屋はやっている。大学生が帰ってからそんなことを考えている。

油断していたら二週間後くらいに電話がかかってきた。「本屋をやるうと思うんです」と言う。大学の仲間と使ってる場所があるらしい。「トリイさんとこみたいになちよつと雑な空間にしたい」とか言う。失礼なヤツやなこいつ。こういう時、どう言ったら正解なんやろうか。利益はちゃんと出したくてとか言っている。出ないよ。とりあえず、本棚には思つてる三倍くらい本が入るということを伝える。お店の名前決まったら教えて、と言つて電話をきる。来月オープンしたいとか言つてたのがじわじわくる。無茶やな。おもしろくなってきた。

おさきどんが東京からやってきた。この人のことは生まれた時から知っている。お兄ちゃんどうしてんの？ こないだ親に勘当されました、とか話していると時間が歪んでいく。おすすめの本ないですかと言うので一時間くらいかけてあれやこれや出してみた。帰ってからSNSを見ると「本を売る気のない本屋」と書かれていた。あの一時間返してくれ。

汽水のほとりから (8)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

以前、定有堂に行った際、奈良さんから「アナキズムについて知りたいと言う人がいるんですが、書きませんか」と言われたことがある。その頃よく口にしたせいだろう、詳しいと思われていたらしい。無論興味関心はあつたが、かといってアナキズム全般について詳しいわけでもなく、せっかくの申し出を快くお受けすることができなかった。奈良さんの頭の中にはブレイデイみかこや栗原康がいたのではないかと思うが、私にとつてアナキズムと言えば、人類学者デヴィッド・グレーバーを描いて他になかった。

グレーバーの名前を覚えてくれたのは、自宅近くにある汽水空港という一風変わった名の本屋を営むモリテツヤくんである。言われた通り、当時出たばかりのグレーバーの名著『負債論』(以文社)を買って読んだ。面白かった。

当時汽水空港は一時閉店中だったので、いつかこの本で読書会を開こうと約束した。営業再開後しばらく経って『負債論』の読書会の実現にこぎつけ、それはコロナ禍が始まった一昨年春まで約半年間続いた。そういう次第で、私はこの本をきっかけにアナキズムに注意を向け始めた。

グレーバーはアナキストを自称し、アナキスト人類学を唱えたことで知られる。それは国家をもたない社会を未開とはみなさず、むしろそうした社会こそ人類の本性に合うことを人類学の知見から立証しようとする野心的な試みである。かつてレヴィーストロースはジャン・ジャック・ルソーのことを満腔の敬意を込めて「人類学の創始者」と呼んだが、グレーバーの唱えるアナキスト人類学の発想はルソーの「自然に帰れ」という発想に近いようにも思う。

グレーバーはまた「予示的政治」という言葉を好んだ。国家の中で生きる私たちも、それぞれの生活圏においては相互扶助的な共同体を形成し、その複数に帰属している。そうした小社会を足場に、国家の秩序や権力が存在しないかのように予示的に自由に振る舞う政治的諸活動を彼はそう呼んだ。彼の考えるアナキズムは、あくまで私たちの日常生活の感覚に沿うものであり、民主的な理念だった。

その彼が昨年九月に急逝し、彼の思想を受け継ぐ仕事の登場を待ち望んでいたのだが、彼の死から一年、ようやく

くそんな本が現われた。文化人類学者の松村圭一郎の新刊『くらしのアナキズム』（ミシマ社）がそれである。著者は翻訳が出る前に『負債論』を広く紹介した人物でもある。『現代思想』二〇一二年二月（青土社）に掲載された「負債とモラリティ」という論文がそれで、『負債論』の各章の内容が上手にまとめられており、読書会のレジュメを作成するに当たっては、大いに参考にさせてもらった。

松村氏のこの新刊が如何にグレーバーをベースにしたものかは、その引用の多さから一目瞭然だが、著者は他に鶴見俊輔、スコット、花森安治、クラストル、きだみのる、イリイチなどを引用し、アナキズムの魅力を伝えている。中でもグレーバーの次に引用が多いのが以前も紹介した『ゾミア』（みすず書房）の著者スコットで、彼が書いた『反穀物の人類史』（みすず書房）では国家誕生の歴史性に対する批判を、『実践 日々のアナキズム』（岩波書店）では国家に対抗する身近な事例をそれぞれ紹介している。

最終章で著者はこう述べている。「国によりよき状態を要求し、その力への抵抗の足場をつくる。そのためには、まず政治や経済を動かす責任や能力が自分たちにあると自覚する必要がある。政治を政治家まかせに、経済を資本家や経営者まかせにしてきた結果、ぼくらはみくびられ、やりたい放題にやられてきた。政治と経済の手綱を生活者が

握り、よりよいやり方をみずから体现していく。その実践が国のやることに自信をもってNOを突きつける根拠にもなる」と。私は一読、「コモンの再生」を連想した。この本の中では「コモン」の語は一度も使われていないが、このようにアナキーな「抵抗の足場をつくる」姿勢こそ「コモンの再生」を強く後押しするものと考えるからだ。なお、これに関連して本書が取り上げるキーワードに「コンヴィヴィアリティ」がある。イリイチに由来する語で、自主共生的な実践を意味するが、著者によれば、現代アフリカを代表する人類学者フランシス・ニヤムンジヨは「コンヴィヴィアリティは、異なる人びとや空間、場所を架橋し互いに結びつける。また互いに思想を豊かにし合い、想像力を刺激し、あらゆる人びとが善き生活を求め確かなものとするための革新的な方法をもたらす」と述べ、その語はまた人間の不完全さを肯定的に評価し、不完全な状態を問題と思わない鍵であるとも指摘しているという。著者はこれを踏まえ、国家や市場のような巨大システムに抗うには、互いを支える異質な他者とのコンヴィヴィアルな交わりが必要だと論じている。これもまたアナキズムを「コモンの再生」と結びつける重要な論点だと言えよう。

悪魔との付き合い方

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

この原稿が載っている頃には、もう総選挙の結果は出ているので、ひよつとすると拍子抜けするような文になるかも知れない。さて、国民はどういう選択をしたのだろうか。東京では毎日、東京メトロ半蔵門線の押上駅から永田町駅まで通勤していた。そう、あの「永田町」。

東京に勤務したおかげで、石破茂代議士から直接話を聞く機会もあったし、安倍元首相や菅前首相(当時は官房長官)、岸田現首相(同外相)の演説を「生で」聞くこともできた。だが「国政」と言いながら、実は永田町という「小さなサル山」の争いとどれほど違うのか、生々しい現実を目の当たりにして、子どもころ佐藤内閣のほとんどの閣僚の名前(坂田文相や愛知外相など)を覚えていた元政治少年は、最近すっかり政治嫌いになってしまった。

だから、久々の「政治評論」になる。

◇ ◇ ◇
もう十五年ほど前になるだろうか。第一次安倍内閣が発足した直後である。

東京の通信社で毎年、地方新聞の編集局の責任者を集めて政治家の話を聞く会があった。この年の講師は自民党の古賀誠元幹事長。「おやおや」と思った。「道路族のドン」、全国遺族会の会長で靖国神社総代。強面(こわおもて)の顔も相まって、私は「なぜこんなゴリゴリの右翼で利権の親玉みたいな男を呼んだのか」と正直思った。

ところが、古賀の一声は意外なものだった。

「安倍が首相になると、危険きわまりない。振り子が右にいったきり、戻ってこなくなる」

そして安倍首相の時代錯誤的な歴史観Ⅱ日中・太平洋戦争での加害者意識の欠如、憲法の平和主義を軽んずる姿勢、内に秘めた強権体質を、口をきわめて批判した。

「われわれ『宏池会』は、保守本流の名にかけても、歴史を逆流させる安倍首相の動きを阻止したい」。そうか、と思った。自民党は決して「一枚岩」ではない、いろんな人間の集合体なのだ、と。

◇ ◇ ◇
その後、安倍は持病を理由にあっけなく政権を放り出し、古賀の心配は杞憂に終わったかに見えた(それにしても

安倍という男は、昨年コロナ禍での唐突な再辞任といい、自分が招いた東京五輪の開会式欠席といい、窮地に立たされるはずと逃げる政治家、という印象しかない。

堅物の民主党・野田首相を相手に「ひっかけ問答」のような党首討論の末、まんまと政権に返り咲いた安倍は、まさに古賀が心配していた通りの政治を始める。機密保護法や安保法制の強行採決、森友・加計疑惑や桜を観る会の不正、防衛省や国土交通省の公文書改ざん…。

当時の世論調査をみると、森友・加計疑惑や官庁の公文書改ざん問題に7、8割近い世論が「首相の説明に納得がいかない」「おかしい」と答えている。

このころ、折りに触れて石破に話を聞くと、「このままでは自民党は国民から見放される」という厳しい言葉が耳に残った。一方、宏池会のプリンス・岸田外相の講演は、新自由主義の見直しや国際協調主義などをすらすら並べたが、どこか上滑りで、きれいごとの印象があった。

◇

◇

◇

はたして今回の総裁選では、石破は悩んだ末、出馬を断念。地元紙は「弱小派閥、国会議員に不人気」「支援者の期待に応えず」と散々だったが、国民や地方党員の人気は相変わらず高かった。怖気づいたのではなく、むしろ前述の危機感から、「ここは河野支援に回ってでも党の流れを

変えたい」という大局観、苦渋の選択でなかったか。

ところが、思わぬ「変節」を演じたのが岸田だった。まず麻生の意を汲んで、師である古賀を宏池会の名簿から外した。総裁選では当初、国民の目を意識して「党の改革」を掲げ、森友問題は「さらなる説明をしなければならぬ」と威勢が良かったが、安倍の不興を買うとたちまち引つ込めた。その後も、ゆらゆらと政権公約は揺れ動く。

結局、彼は何をやりたいのだろう。目の前のニンジン（首相の座）を、ただ手に入れたいがための日和見主義。石破とは対照的だ。「宏池会政権復活の『手段』なのか、さもなければ現実主義という名の『変節』なのか」と朝日新聞にこっぴどく書かれた。

◇

◇

◇

岸田の首相就任後、テレビ取材を受けた古賀は、岸田が安倍と同じく敵基地攻撃能力を語ったのに「あつと驚いた」という。マックス・ウェーバーの言葉を引用し、「政治家は目標達成のため時に悪魔とも握手する。だが、悪魔の言いなりになるのは本末転倒だ」。迷走するかつての弟子にクギを差したが、もはや手遅れなのかも知れない。

予約待ち 1人

森本 龍哉

(鳥取大学地域学部4回生)

てくる。かつて私もその小さな子どもだった。紙芝居や絵本を手にしていたころがあり、次第にそのコーナーから離れてべつの棚を渡り歩き、窓際にあるテーブルでノートを開きシャーペンペンシルを握る時間を過ごすこともあった。マスク越しの現在でも、窓際の席でイヤホンをつけて勉強する高校生と思いき姿が見えるし、絵本を手にする小さな足音を聞くこともできる。館内の新聞をひとりで閲覧し、そこに書かれた出来事と会話するように喋っている人も見かける。

そうした現在において、はじめて経験することがあった。基本的に私は1度まとめて本を借りたら、それを返却期限内にすべて読み終わるまで追加でべつの本を借りに出かけることはない。しかし珍しくどうしてもいますぐに読みたい本ができてしまい、すでに7冊借りている状態でその1冊を追加で借りるために再び図書館を訪れた。

消毒と検温を終えて館内を歩き、目当ての本を手手に「貸し出しでお願いします」と利用者カードを手渡す。すると新たに貸出票の紙が本にはさまれた。そうして館内をあとにしようと出入り口に向かう私の視界に、小学生と思しき姿が入ってくる。小学生は検温装置の前に近づき、しかし身長が足りないために少しずつ後ろへ下がりが、検温装置との距離はそれにつれて離れていく。私がその小学生の

ランドセルを背負うようになる前から、私はその図書館に通っている。小学生のいつからかその図書館の利用者カードを持っているが、そのカードはつくりなおす必要もなく、いまでも私の財布のなかにあつて、使いつづけている。だからそのカードの裏面には、私の名前が祖母の字で書かれたままだ。油性ペンで書かれたそれは消える気配がなく、しかしそういえば誰かの手書きの言葉を目にする機会が減りつつあると感じるのは気のせいだろうか。

その図書館には、いつからか出入り口に非接触型の検温装置が常設されている。その大仰な画面の前に立ち、少し膝を曲げて自分の顔をそこにおさめる。毎回同じような数値が表示され、私は館内に入っていく。

その先にいる人たちがつくりだす静けさは変わらない。その静けさのなかでときおり、小さな子どもの声が聞こえ

横をとりすぎるころには、それでは検温できないのではないか、と思われるくらいの距離にひろがっていた。私は振り返って画面にその姿を確認することはしなかった。

館内を出ると、私は本から紙を抜き取り、計8冊に更新された貸出票を見た。そこで、これまで目にしたことのない表記を見つけることになる。その日以前にすでに借りていた、とある1冊の本。その本のタイトルの右隣には返却期限日。その日付のすぐ下に、次のように印字されていた。

予約待ち 1人

当然、この本を借りたときにはなかった表記だ。確かにそれは出版されてから比較的時間が経過していない本だったが、それでも私はそれを館内の棚から抜き取り借りたわけ、その時点で予約待ちをしている人はいなかったことになる。その表記は、その本を私とほとんど同じタイムミングで読みたいと思った人がどこかにいるということを知らせていた。同じ図書館を訪れるくらいには離れていないどこかに。

あたたかい脱力感のなかで私は、生きなきゃな、と思った。この本をきちんと返却し、予約までして読みたいと思っている次の人に生きて渡さなければならぬ、と。顔も名

前も知らない、しかし同じ時期に同じ本を読みたいと思うくらいには近くにいる誰かのために私はその本を手にし、またここにやってくる必要がある。おおげさな言い方ももしれないが、実際そうなのだ。その1人がどこかで私をこっそりと生かしている。

そんなふうだから私は、わざわざ追加で借りに出かけた1冊をあとまわしにして、予約待ちの誰かがいる本から読み始めることになっている。その予約待ちの誰かが誰なのかを私を知ることはないだろう。でもその1人が、たとえば検温装置に苦戦していたあの小学生であったとしても、何もおかしくはないのだ。

映画と短編をめぐって

松田 裕史

(高校教員)

村上春樹の短編集『女のいない男たち』に所収の「ドライブ・マイ・カー」が映画化された。監督は濱口竜介。今年、第七十一回ベルリン国際映画祭のコンペティション部門に『偶然と想像』が出品され審査員グランプリを受賞。

『ドライブ・マイ・カー』は第七十四回カンヌ国際映画祭コンペティション部門に出品され日本映画としては史上初となる脚本賞受賞。まさに飛ぶ鳥を落とす勢いの、世界で注目される監督である。師匠に当たるのは黒沢清。長らく日本映画を牽引した一人で世界的にも評価が高い。北野武や黒沢清は日本より先にヨーロッパで評価され、日本に逆輸入の形で作品が上映されるようになった。この二人以降、世界レベルの日本映画／映画監督が出てこないのではと思っていたが、是枝裕和や濱口竜介がバトンを受け継いでいる。

短編の「ドライブ・マイ・カー」は初出が『文藝春秋』

だったがその時は読まなかった。僕は特段、ハルキストではないが、時々、村上春樹を読みたくなる。柴田元幸監修の『MONKEY Vol.2』に所収されていた「シエエラザード」が『女のいない男たち』にも入るということで件の本を出版時にすぐに購入。六つある短編の中で先頭に配置されている「ドライブ・マイ・カー」は時間も忘れてのめり込むように読んだ記憶がある。それ以降読んでいなかったが、今回、映画化に際して再び脚光を浴びていたので再読することにした。今回は再読ということもあり、やや距離を置いて分析的に読む比率を高めた。

主な登場人物は中年のプロの役者である家福(かふく)、家福の専属ドライバーのみさき、若くして亡くなった家福の妻、その妻と不倫関係にあった役者、高槻。有り体に言えば人を「理解すること／理解できないこと」の狭間に揺れうごく家福が描かれ、「理解できないこと」が解消されることはないが絶妙な語りで物語の最後で微かな希望が差し込んでくる。家福が役者であるという設定も物語のコアになっている。家福に次のような地の文の語りがある。

「しかし想像することにも増して苦しいのは、妻の抱えている秘密を知りつつ、自分がそれを知っていることを相手に悟られないように、普通に生活を送ることだった。胸を激しく引き裂かれ、内側に目に見えない血を流しながら

ら、顔にいつも穏やかな微笑みを浮かべていること。何ごともなかったように日常的な雑事をこなし、何気ない会話を交わし、ベッドの中で妻を抱くこと。おそらく普通の生身の人間にできることではない。でも家福はプロの俳優だった。生身を離れ、演技をまっとうするのが彼の生業だ。そして彼は精いっぱい演技をした。観客のいない演技を。」しかし、演技をすることで演技前の自分とは違う自分が立ち現れてくる。

「いやでも元に戻る。でも戻ってきたときは、前とは少しだけ立ち位置が違っている。それがルールなんだ。完全に前と同じということはあり得ない」

この演技のくだりが後半に出てくる「盲点」というキーワードと共振しているように僕は感じた。家福は高槻との会話の中で、自分が妻を「本当には理解できていなかった」と告白する。それに対して高槻は、

「もしそれが盲点だとしたら、僕らはみんな同じような盲点を抱えて生きています。」

と答える。この一文は唯一、短編の中で二度出てくる文である。観客のいない演技をする中で否が応でも変化する自分、その変化は相手との関係性にも浸食し、時に乗り越え難い断絶をもたらす。そこにあるはずの盲点は、僕たちには見えない、触知できない。この短編は盲点をめぐる物語

とも言えなくもない。

再読し終わったときに思い浮かんだのは芥川龍之介の「藪の中」である。「藪」は確かに存在する、しかし可視化することはできない。覗いても闇が拡がっているばかりだ。「盲点」も確かに存在する、しかしその姿を捉えることはできない。「ドライブ・マイ・カー」が「藪の中」のオマージュかと錯覚するほど盲点と藪が重なり合う。

また、演技をするのは役者だけではない。日々、僕たちは多面的な自分を生きている。それぞれの場面で違う自分を演じる。家福の言葉を借りれば、

「いったん自己を離れ、また自己に戻る。しかし、戻ったところは正確には前と同じ場所ではない。」

家福と専属ドライバーみさきとのやり取りは文章で読むからこそ滋味深さやドラマ性が立ち上がってくるのではないかと思う。村上作品でいえば『ノルウェイの森』が何年前に映画化されたが、内田樹が先陣を切って酷評したように映画は駄作に終わった。だからこそ今回は期待したい。濱口監督が映画というメディアでどのように「ドライブ・マイ・カー」を解釈し、再構築したのか楽しみである。

バイオームを意識して ノマド③④

芝野 浩貴 (地球探検家)

ユージンスミスの名前を知ったのは、徳永進医師企画の写真展の時だった。1990年代前半のことだったと思う。映画「MINAMTA」では、封印されてきた「入浴する智子と母」が再現されていた。スミスは沖縄戦での取材で負傷したり、水俣病の取材ではチツソ社員に暴行され、生涯後遺症に悩まされた命懸けのジャーナリストであった。別の映画の「ミッドナイト・トラベラー」は、アフガニスタンの実態を国営放送で流した後、2015年死刑宣告を受けた映像作家のハッサン・フアジリが妻と娘二人を連れて難民となり旅をする話で、これまた命懸けの話である。世界の難民は2005万人。タジキスタン、ウズベキスタン、トルコからブルガリアまで5600キロ移動。撮影は家族3名のスマホで行っている。二つの映画から、徳永進著の「隔離 故郷を追われたハンセン病患者たち(山岩波書店)」、加藤登記子著の「哲さんの声が聞こえる(合同出版)」が脳裏によぎり、中村哲さんを想い出さずにはいられなかった。マドラツサ(神学校)で学ぶ子供のことをタリーブ、複数でタリバーンと呼ぶらしいが、神学校をアメリカが誤爆したこともあるという。真実を知るのになんの目

に委ねるのか問われる。

コロナ禍で、一度に多くの人と出会うことが封印され、相変わらずノマドを続けているが、水とともに紀行している。「苦海浄土」の著者の石牟礼道子さんの「多くのメチル水銀の犠牲となったところに資料館が立っているからねえ」という言葉に触発されて水俣まで行ったこともある。資料館の周りは広い運動場として埋め立てられ、そこでは子供達が元気に野球やサッカーをしていた。不知火湾から見える天草半島については音信不通60号で触れたが、それに関して、知人が「のさりの島」についての情報を送ってくれた。のさりとは、「自分のいまある境遇は天からの授かりものである」という意味を表す天草の言葉。石牟礼道子は天草出身である。

9月は鳴門の渦から始まった。世界三大渦潮と言われている。(イタリアのメッシーナ海峡、北アメリカのセイモア海峡が残りの2つ)大潮ではプランクトンが動くために、漁が成功する確率は高くなるが、それには太陽と月の引力が絡む。鳴門海峡は狭くてV字型の地形であるために海流と潮流の流れの差がより増幅して大きな渦となる。私は船でなく橋の上からの「渦の道」を歩き、妄想に耽った。潮流を読むという言葉があるが、文字通り潮の流れを観察した。

口気圧の差で天気が変わる。小さな渦を観測して、気象予報図の精度をどうあげてきたのか？

口宇宙創成のビッグバンでは、星はどんな渦としてぶつかりあったのか？

口光の右巻きと左巻きについて、なぜ植物は右巻きの光を好むのか？渦を両サイドから観察するために、淡路島にもわたり、地殻変動の奇跡(玉ねぎの産地)も実感して、日和佐の海亀博物館へ。飼育員の人に、海亀絶滅の危機の話を伺う。

口地温が低ければ雄、高ければ雌として産まれるので温暖化になると種に偏りができる

口乱獲だけでなく、産卵のための砂浜の維持や人工光の遮断などをケアしている

口雑食のアカウミガメより草食のアオウミガメの方が食用として食べられる

口プラスチックゴミに関しては認知されてきたが、アルミニウム、ヒ素、水銀、亜鉛などの重金属がウミガメの腎臓や肝臓に残留している

*道の駅名と温泉は括弧()で閉じている

ノマド③(四国一周・右巻き) 高松、鳴門、淡路島(うずしお)、徳島、(日和佐)、(宍喰温泉)、室戸岬、高知、(カワウソの里)、(四万十温泉)、中村、(よって西土佐)宇和島、内子、

松山、しまなみ海道、四万十川にはダムはない(厳密には本流には15 m以上のダムはない)。四万十の鮎や鰻を復活させ清流を守るまでには、戦時中に軍需工場への送電目的から作った堰の廃止を巡り、魚道の確保を求め、風力・太陽光・バイオマスエネルギーの併用も兼ねた長い村民の闘いがあった。これは震災10年後に再訪した福島でも然り。浪江町に世界初の水素エネルギー研究フィールドが置かれたり、南相馬市が風力発電の拠点となったり、エネルギーを巡る自然と人の共存のものがきは全国で進行中。

ノマド④(北陸・中部・東北・左巻き)舞鶴、(シーサイド高浜)、鯖街道、(若狭熊川宿)、琵琶湖、(塩津街道あぢかまの里)、福井、(山中温泉)、小松、金沢、白川郷、高山、松本、(下諏訪温泉)、(はくしゅう)、甲府、松戸、(しようなん)、水戸、いわき、(ならは)、富岡、双葉駅0.661エシール、(なみえ)、(南相馬)、(相馬)、仙台、石巻、南三陸、(大谷海岸)、(高田松原・奇跡の一本松)、釜石、久慈、(はしかみ)、八戸、(恐山温泉)、(大間崎)、青森、(酸ヶ湯温泉)、(奥入瀬)、十和田湖、弘前、(鱒ヶ沢)、(不老ふ死温泉)、(十二湖)、秋田、角館、(なかせん)、(乳頭温泉)、田沢湖、山形、(天童温泉)、米沢、福島、猪苗代湖、会津若松、(鬼怒川温泉)、宇都宮
「2021年は北海道以外の46都府県と対話した」

八代日記 (二十)

齊藤 仁昭

(元長崎書店)

十月某日

漫画を久しぶりにゆっくり読めた。大山海『奈良へ』(リイド社)。帯と解説にもあるが傑作だった。それ以上はいつものごとく上手く言えない。思えばPOPの書けない書店員であった私は。つげ義春から異世界系までの技法を駆使し、ここまで無常を描き切った漫画を知らない。素晴らしかった。書店員であったなら、コミックコーナー以外で文芸・人文書の棚前にも積んだだろう。

十月某日

またも漫画を読む。すぎむらしんいち『最後の遊覧船』(小学館、全2巻)。『ディアスポリス』以来、十年ぶりにくらしい氏の作品を読んだ。映画にしてほしい良作。

ツイッターで大友克洋が「映画化の権利をくれ」と言っていたのを読んだような気がするが改めて探すも見つからず。ホン・サンス、撮ってくれないかな…。水辺と複数の

男女のコント。

十月某日

さらに漫画を読む。つげ忠男『昭和まぼろし 忘れがたきヤツたち 第1集』(ジーオーティー)。COMIC MeMuというサイトでの連載を単行本化。山田参助さんいわく「焼け跡劇画最高峰」。感動した。

大きな画面でサイトを観ていただくと特にわかると思うのですが、ページの佇まいが美しいんです。素人の知ったかぶりで申し訳ないですが、美しいと思いました。あとがきに「完成は無理かもしれない」とあるが、2巻も楽しみにしています！これも書店員であったならば、現代史コーナーでいける。

十月某日

メンバー全員ワクチン接種も完了し、緊急事態宣言も解除されたということで、恐る恐るついに東京へ練習に出向いた。

移動中の電車内を見回すと、吊り広告がかなり減っていた。こりやいろいろ敵しいというかフェーズが変わったのだろうなと推測。扇情的な週刊誌の広告はそんなに見たくはないからホッとはする。あれがあるのかないのかで

集団の無意識がだいぶん違ってくるんじゃないか。でもネットニュースとか見れば同じなのかな。

どこにも寄らずにスタジオ直行。9ヶ月ぶりくらいにメンバーと再会。連絡は取り合っていたのでさほど久しぶりという感じもなかったが、最初の何時間かは演奏がガタガタだった。徐々に勘を戻していくしかないが、以前とは違うフォームにたどり着く予感。変化を強いられるだろうが、上手く受け入れていかねばなるまい。

22時半まで練習後、泊めてもらうメンバーの家まで歩いて帰る。40分くらい歩いた。東京は歩けるのがいい。

翌日も朝からスタジオ。4時間練習して、そのまま空港へ向かう。練習10時間の1泊滞在。

途中に書店で永野護『ファイブスター物語』（角川書店）の16巻を発見し購入。自分は漫画を読むのが遅いが、ファイブスターに関してはいつも以上に遅い。多分2時間でも読み切れない。読むときは物語に没入したいので、時間が取れそうな時までお預け。

鍵が無いのでないのなら　うちに帰ればいい
そこで待ってる音楽が

あれば知らない　もう知らない
俺は知らない　もう知らない

空を飛んでくHITの　迎えが無いのなら
何を待ってりやいいんだろ
あとはいらない　もう知らない
俺は知らない　もう知らない

そこに立ってる幽霊の　意味が無いのなら
朝を待つしかないんだろ
あとはいらない　もう知らない
俺は知らない　もう知らない

霧がかつてく風景が　夢じゃないのなら
朝を待つしかないんだろ
あとはいらない　もう知らない
俺は知らない　もう知らない

あとはいらない　もう知らない
何も知らない　もう知らない

（ケバブジョンソン「知らない」作詞・杉浦真寛）

影が薄くなる話

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

影踏みと言う遊びがある。あつた、と言うべきかもしれない。今の子供たちは知っているかどうか。(岡本綺堂は、後述の作品の中で、明治時代でも既に廃れたと記している) 鬼ごっこの変型とも見え、鬼が逃げる相手の影を踏むことで交代する。地域によって、ルールに色々なバリエーションがあるようだが、影を踏む、ということとで攻守交代する点は変わらない。逃げる時のコツは、太陽の反対方向に走ることである。逆に、鬼は太陽の方向に追い詰めて行けばよい。なお、昼時に遊ぶのは避けたが吉。南中時、影が最も短くなるのは子供でも知っている。

フレイザーは『金枝篇』で、マンガイアの戦士の話を紹介している。強い戦士トウカイタワは、朝の影が一番長い時、力が最大となり、正午に最小となり、午後、また少しづつ戻ってくる、と。そして、この秘密を知った人物によって、戦士は正午に殺された。

古代ギリシヤや東欧圏では、建築の安全を図るため、動物を生贄にし、礎石の下に埋めたというが、別の方法として、人の影の長さを測り、その物差しを人の代わりに埋めたそうだ。そして、その人物は一年以内に死ぬと信じられた。(同前)

影踏みに戻るが、これは元々、十三夜の月明りの下に行っていた年中行事だそうである。(今年の十三夜は十月十八日だった) 呪文のような言葉を唱えながら興じるもので、今日では失われているものの、何か民間信仰的な意味合いがあつたようである。

遊戯になるくらいであるから、生きるの死ぬるのといった深刻な含みはないようだが、綺堂は、この風物を題材にして、「影を踏まれた女」という怪談を書いている。明治人らしく(圓生が自作に「真景」と被せた如く)、合理・不合理ふたつの解決を提示して読者に任せたモダン・ホラーである。

子供たちに影を踏まれた女は死ぬのであるが、一体に、アジア、アフリカ辺では、影は、その人物の生命や精力に繋がるものと考えられているようである。

中国の僧は「七尺去って師の影を踏まず」（日本では三尺です。国土面積の違いでしょうか。現今では、地価高騰を受けてか三步にまで縮まりましたが）と説いたし、前述のフレイザーはアジアやアフリカの蛮人の、信仰とも言うべき影や鏡像への畏怖（ウエタール島の呪術師は影を槍や剣で突いたり、切ったりして人を病気にする、古代アラビア人は、ハイエナに影を踏まれると話す力と動く力を奪われ、屋根の上の犬が地面に映った影を踏まれると転げ落ちる、等々）を語り、水や鏡に映った鏡像も、自分の魂と同様に考えた人々も多いと述べる（『金枝篇 初版』第二章第二節）。そう言えば、自分の影を相手に酒を呑んだ詩人もいたな。

横山光輝の忍者漫画の中には、「影縫い」という術の遣い手が出てくる。相手の影に苦無や手裏剣などを打つと、本人が動けなくなってしまう。影繋がりで壁や地面に縫い付けるのである。

これが、キリスト教以後のヨーロッパでは、趣が変わる。不思議とドイツのお話が多いのだが、ホフマンの「歳晩節の夜」やシャミツソンの『ペーター・シュレミール綺譚』、エーヴェルスの『ブラーグの大学生』などに見るとおり、

影や鏡影は悪魔との取引材料である。魂を奪う前段階、といった扱いで、生きてはいけるが、人に知られるや、悪魔に身を売った輩として、忌み嫌われ、身内からも追い払われ、ひとつ所に住めなくなる。明らかに、さまよえるユダヤ人のイメージと重なっている。

影が、神の「その日を悪しき者のうへにも善き者のうへにも昇らせ」（マタイ五・四五）給うた結果生じるものであるならば、それを失うことの意味も明らかである。

しかるに、バリの『ピーター・パンとウエンデイ』は、いささか能天気で、影は窓に挟まれて簡単に千切れ、くるくる巻かれて箆笥に仕舞われ、縫い針で元のように体に縫い付けることができってしまう。ピーターが影を取り戻した来たのは、「みつともない」からであった。

対して、アンデルセンの「影」は、かなりダークでブラックで、あたかもドツペルゲンガー譚のよう。まあ、作家の性格の反映と言えなくもない。

影にも国柄、人柄があるようである。

鳥取あれこれ その六十三

内田 克彦

(地域研究家)

(承前)

いわゆる奥多本の『長瀬村利七漂流談』について、「秘録」にあたる文章を読んでみた、それが載っている文書を探すことにした。

まず、『日本庶民生活史料集成 第五巻 漂流』の「解題」に、「この書の存在が世に知られるようになったのは、「一九三八年に」谷田亀寿氏が奥平家に襲蔵された写本をもとにして、若干の新註を加え、これを謄写印刷して配布された事による」とあったため、県立図書館に配架されていた該当本を確認してみると、茂住による翻刻文(倉吉市立図書館蔵)と同様に、「秘録」はなく、中巻もなかった。

次いで、県立博物館が二〇一一年に購入した『漂流談 上中下全』(林為成写)に当たると、「上中下全」とある表題とは異なり、「前巻」「後巻」(その文末に「秘録あり」の記述あり)「異聞秘録」の順で載っていた。

ところが、「異聞秘録」の内容を『集成』と照らし合わせてみると、『集成』の「巻之中」とほぼ同じ内容である

ことがわかった。そして「前巻」及び「後巻」が『集成』の「巻之上」及び「巻之下」に当たっていたのである。

また、県立博物館二〇一〇年度企画展「海と生きる」で紹介された、早稲田大学図書館蔵の『長瀬村利七漂流談 全』の『図録』の「図版解説」に、「これまで紹介されていた写本に欠けていた「利七漂流談異聞秘録」が記されるなど自筆本に近い写本である」とあったため、『古典籍総合データベース』により確認してみたところ、これも先の県立博物館蔵本と同様の構成であった。この構成の方が、『集成』のそれよりも原本に近いと考えられる。

加えて、この早稲田大学蔵本には、「後巻」の後ろの方に、県立博物館蔵本にはない、「乙吉の事」「力松の事」「善助の事」の項が立ててあった。この写本は、「安政五年」と書いてあるとはいえ、一番原本に近いものと推測される。残念ながら、この写本は未だ翻刻されていない。

因みに、奥多本をもとに、元羽合町文化財委員長である松岡貞信が、口語体に訳した『長瀬村利七漂流談他三篇』(但し、「秘録」の部分を欠いている)を一九七九年に発刊しており、これがきっかけとなって、一九八一年「青20

少年よはばたけ 長瀬村利七顕彰會」と刻んだ記念碑が建立されている。

次に、茂住による尚徳館本の翻刻文（『大倉山論集』一九九四〜九六年刊）の底本は、県立図書館蔵の『漂流奇談上』『漂流記談 中』『同 下』である。茂住による「解題」には、「久松閣図書」「池田家寄贈」の印があるので、「推測の域を出るものではないが」藩主への献上本であったのかもしれない。」としている。

しかしながら、県立博物館蔵本に、茂住による「解題」には載っていない、「堀文庫」の中の、表紙が『第一五九号 漂流紀談 薄頭散人輯手抄』、末尾が「此書寺町秋山豊氏ヨリ借りテ写ス 寺町堀氏蔵」と書かれた、一綴りの一冊本があった。県立図書館蔵本と県立博物館蔵本といずれが原本に近いものか検討する必要がある。

なお、その「解題」には、倉吉市立図書館蔵で「河嶋蔵書」の印、「河島雅弟氏寄贈」「此書寺町秋山豊氏ヨリ借りテ写ス 寺町堀氏蔵」と書かれた『漂流紀談』の『巻巻』『卷式』『卷参』の謄写本が紹介されているが、末尾が県立博物館蔵と同文であるため、その謄写かもしれない。

また、これ以外に、県立図書館蔵で二〇〇八年に受け入れた、「才代 中村氏」とある、上中下の写本がある。

さて、前回、ペリー来航に関して抜き書きしたが、実はその内容は、利七が「日本尾州乙吉」から聞いたことであった。乙吉とは、春名徹著『につぼん音吉漂流記』（一九七九年刊）に書かれている音吉のことである。

咄しの序、又彼亜墨利加船日本へ参りし様子尋ねけるに、乙吉胸を打て嘆息していへるは、その儀ハ誠何とも申方なき次第也。

二〇一八年に、佐伯真一著『武国 日本』が刊行され、「上海で利七に語った音吉の談話」として、佐伯は茂住翻刻文から次の部分を現代語訳して引用している。

もともと、今回の件は、ペリーたちは「日本の武威」を深く恐れていたわけだから、近海でただ一打ちに打ち払ってしまったら、再び日本に近寄ることもなかったはずである。それなのに、あのように穏便な対処をなさったのでは、これからのようなことが起きないとも限らない。これにはきつと事情があるのだろうが、せつかくの機会を失ってしまったものだ。

（以下、続く）

二〇二二・一〇・一九

生 でしか傳へられなひ…

秦阜 梅林

(楽人)

序

録音で聴ひて「何かしら決定的なもの」の抜け落ちてゐるやうに思へてならなひアーティスト達…ギーゼキング、シゲテイ・そしてフルトヴェングラーもさうかもしれなひ。…年代的に聴く事の叶はなかつた古の例…

逆に生は聴けたけれど、現在録音で聴ひて、そこに決定的な違和感を感じるのがミケランジェリ、チェリビダツケ、C.クライバー、ホルシヨフスキー等。此れらのタイプは、生、實演を通じ、限られた空間でのみ、或る特殊なアウラを放つ強烈な個性であつた。

I

ギーゼキングは、今録音で聴くと必要以上に、色彩感
を欠き無機質なタツチ、ブツキラボウ…あれ? 何か違ふ
のでは…? おそらく実演を聴ひた方々が此処には無ひ何
らかの+αにこそ魅せられ絶対的な価値を感じてゐたの
では? と思はれてならなひ。彼の「美学」そのものと
いつた… 何かしら?

フランソワの無縫さ!も実演でしか決して味はふ事なき
類ひの魅力だらう…録音では「去勢された」感ばかりが
否めなひ、どうしても…。

II

勿論、どんなアーティストだつて実演と録音は甚だ違
ふ。それはさうだ。しかし大抵は録音でも何らかのニュ
アンスや特色を微妙なりに伝へ不完全乍らも「実演の記
録」を大まかには捉へ偲ばせるものだ。例へばH.シエリ
ングのL.は、實演ではもつとキラキラした美音で、表
現の陰翳は濃く人間的、豊かな情感を與へてくれるので
あるが(録音では、見事缶詰の中程よく収まった「お行
儀良ひ商品」になつてゐて)此れからの人は「あんなも
の」だと思ひこんでゆく訳だ…。さて先のリストの人達
はもつともつと落差が著しひ。その辺り当人も心得てゐ
てこそその「録音嫌い!」であつたらう。実演でしか伝へ
られなひ生舞台の醍醐味!そこにこそ真骨頂の聴かれる一
期一会の芸術。

III

殊に歌手に於ひて。テバルデイの如きベルカントの理
想的美声は、ある程度録音からも偲ばれるが、カラスの
演劇的、迫真の舞台になるとまう録画でも臙げにしか、
その感動の断片を伝へる事が出来なひ。

シヤリアピンの「ボリスの訣れ」、カルーソの実際の舞台はいったひ？どのやうな感慨を與へたものであつたらう?! 圧倒的なカリスマ：若しそこそが欠落してゐるとしたら?! 録音にいったひどれ程の価値があると言へるだらう?

IV

その録音盤でさへ数々の物語を喚起させ多くのアーティストに靈感を與へたサラサテのムソルグ、更に其れを遙かに凌ぎ、人々を驚嘆させ人生を変へたパガニーニ！悪魔のヴァイオリン：

実演が聴けたら? と…溜息の漏れるのはブルックナーやフランクのオルガン演奏、そしてショパン、リスト、ベートーヴェン、モーツァルトのピアノ! いや、大バツハに至つては「楽譜に遺されたものはごく一握りに過ぎなひ」と言はれる、生の即興演奏が聴かれ何らかの形に遺されるならば! 彼の作品リストの様相を根本的に替へて了ふに違ひなひ。絢爛豪華眩ひロココ芸術の出現に、ストイックなプロテスタント、ゴティック的モノクロームで脆弱なバツハ像は一掃されるだらう。

V

音楽に限らず芝居や舞踊、話芸からスポーツイヴェント迄、現在はコロナ禍でオンライン映像・画像配信とあつ

た、手軽で便利、安直なモノ許り珍重され「本物、生でしか傳へられなひ尊ひもの」の益々敬遠され勝ち、…「偽物」ばかり横溢する、薄っぺらな「お手軽文化」時代、真つ盛りではある…いやはや。

2021. 10. 20.

「今回のディスク」

- ① M. ムソルグスキー「ボリス・ゴドゥノフ」(リムスキー＝コルサーコフ補筆完成版) (ハイライト盤) G. セル指揮 アレクサンドール・キプニス他 1943年ライヴ
- ② M. ラヴェル「夜のガスパール」○A. B. ミケランジェリ pf. BBC ロンドン、スタジオ放送録音ライヴ 1959年6月30日 ○ギーゼキング pf. 1954年録音
- ③ S. フランソワーズ ラヴェルピアノ独奏曲全集「夜のガスパール」他



イラスト 秦阜梅林

本を読むのは孤独でしょうか

三浦 永理

(青翔開智中学教員)

本と巡り会うのは難しい。

大人も子どもも、本を読む時間はない。ネットを見る時間はますます増えていくけれども。おかげで近くに本を置いておくだけでは、本を手にとるということにすぐにはつながらない。

今年話題になった本の中に、『スマホ脳』（新潮新書）がある。過激なタイトルとともに、スマホの悪影響を語る一冊だ。大人のみならず、子どもへの影響も語られているが、確かに極彩色の世界に一瞬で誘うスマホの世界はどこまでも魅力的に広がっているように思える。白黒の文字ばかりの本より、短い時間でドーパミンの放出を感じられるだろう。

とはいえ、中学生の頃には海外文学を文庫で読むように

なっていて、高校生でレポートを書く頃には専門書にあたる癖がついていた私は、いわゆる「本の虫」なので、無条件に「本を読むのは良いこと」と周りの人に押し付けているかも知れない。

いずれにせよ、読書習慣がついたのは、学校の登下校の時間があったせいだ。電車に乗っている間、せつかくなら何かしていたい。当時はスマホもなかったので、自然と本を取り出していた。

特に、中学で東京に引越した直後は、ナイーブだった。学校の図書室にとりあえず行って、「ここの本を読んでいれば大丈夫」と思ったことを覚えていいる。図書室は静かだし、そんなに通い詰めたわけでもないのに、窓から校舎を囲む木々がよく見えたことをよく思い出す。

私はひとりでも、本があると思えた。

「本を読むようになるのは、孤独になろうと思うからじゃないか」と、ある人に言われた。

少しカッコつけて大人向けの本を読んだり、「周りの子と自分は違う」と読んでもみなかった本を手にとったり、そういう経験が「本の虫」の一步目かも知れない。

本を読んでいる間は、人とおしゃべりするわけにもいかないし、自分一人の時間を持てた時にやっと読める。

一人でなければ、読書はできない。

私は本を読むとき、孤独だろうか。

「巨人の肩の上に立つ」ともいうが、本を読むことはその本の背景が作られた歴史や社会と対話するということがある。自分がその歴史の一部に立っていると感ずること。自分がどんな社会の中にいるのか確認すること。私にとつては、「大河の流れ」を感じるような時間でもある。著者や登場人物、さまざまな人の姿から、私はある意味経験を重ねていく。

また、本を読むことで、私は自分の思いが自分固有なものではないかも知れないということに気がついていく。残念ながら、自分と同じようなことを考えている誰かはいて、幸いなことに、自分と同じことを考えている作者、その本に共感している読者という誰かがいる。寂しいかな、嬉しいかな、私は一人にはなり得ないということを読書によって知る。

かつては、その本が出版され、流布していることがその「孤独ではない」という確証になっていた。しかし、今の時代は周りにいなくとも、ネット上で同じように受け止め

ている「誰か」の存在を見つけることが容易になった。今まで一人で読んでいた本も、その読書会を見つけたことができる。SNSで感想を言い合うなんてこともあるかも知れない。自分で感想をあげてみて、そこに反応をもらうなんてこともある。

つながりすぎてしまうこの時代には、結果的に、本を読んで孤独になつてもどこかつながれるような時代になっているのかも知れない。

いとも簡単に人とつながれるネットの時代。それでも、本を手にとって、かつての人々が考えていたことに想いを馳せることに、まだ魅力はあるのだろうか。

その魅力を感じるには、一旦人とつながらないで孤独なひとときを持たなくてはいけないだろう。ただ一瞬でもその時間を持たたなら、私たちは本の世界とつながることができる、その後ろにある世界ともつながることができる。それに耐える忍耐が、私たちには必要だ。

その作業はあまりにも地味で、時には孤独だから。

柘榴 放哉さんとくだものの続き



あきの素生

(くうねるめがね)

柘榴が口あけたたはけた恋だ

学生の時分、放哉句にふれ始めた頃に、好きになった句だ。単純に、なんか格好いい、と思っただのだ。柘榴を口にしたのは、子どもの頃に一度だけ。熟して割れている実を見つけ、幼なじみと弟と、三人でひと粒ずつ食べた。酸っぱい、という顔を、無言で見合わせたのを覚えている。

ふだん、スーパーなどで柘榴を見かけることは、あまりないように思う。少なくとも、自分の身近では。売られていたとしても、現在食用として流通しているのは、ほとんど海外のものだという。国内で栽培しているところがあるのかと、統計なども見てみたが、平成一八年に、全国の栽培面積の合計が一ヘクターと記録されているのを最後に、柘榴の数値は記載されなくなっている(収穫量は平成一五年、出荷量は平成一〇年までしか記録がない)。江戸時代には、甲斐の国を代表する果物「峡中八珍果(甲斐八珍果)」のひとつに柘榴が挙げられているから、当時はそれなりに

収穫されていたのだろうが、昭和五二年以降の産地を見ると、広島と福島がやや多め(山梨も二回出てくる)。ただ、ほかにも静岡、徳島など、年度によって記載されている産地が異なっているのを見ると、特にここ、という主産地もなかったのではないだろうか。(＊1)

と、つい食べることを中心に考えてしまいが、観賞用に、庭などに植わっているものは別だ。薄赤く独特な形をした実、割れたところからこぼれるようにのぞく、つやつやとあざやかに赤い、寶石のような種たち。柘榴を題材とした絵画が数多くあることが示すように、その姿は人を惹き付けるのだと思う。

中央アジア原産といわれる柘榴が日本に入ってきたのは平安時代。江戸時代中期から花柘榴の栽培が盛んになり、大正時代に全盛期を迎えたのだとか(＊2)。花柘榴にはふつう実がならず、八重咲きなどする花を愛でる。実も花も美しく、放哉さんが生きた時代、柘榴は今よりずっと身近なものだったのだろうか。

冒頭の句に惹かれた理由を、もう少し深く考えてみる。ちなみに須磨寺時代の句である

まず、口をあけた柘榴の姿が、まさしく「たはけ」て

いるなあと感じた（美しいと言った端から、とは思いますが、
ばか、と口を開けっ放している様子を想像してもらえれば）。
放哉句にふれるときに思うのは、放哉は、これ以外ない、
という言葉で詠んでいる、ということ。俳人としては当然
のことなのだろうし、推敲に推敲を重ねて採し当てるのだ
と思うが、最終的に選んだ表現に、彼の言葉に対する厳し
い姿勢を感じる。

上野千鶴子が放哉句を「うたの極北」と表し、「感傷を
よせつけない」と書いた（*3）。それを読んで、だから
自分は放哉句が好きなのだ、と納得したものだ。柘榴の句
も、己を突き放したような様子が気に入ったのだと思う。で
も、自分の（かどうかは知らないが）恋を「たはけた」も
のと嘲う態度には、感傷が差しはさまれている。だからこ
そ、当時は気が付かなかったけれど、ちようどよく響いた
のだろう。

「たはけた」という書き方が、ひと役買っていたように
も思う。現代の表記ではない分、感情が乾いて伝わった。
これが「たわけた」だったらどうか。もう少し湿っぽく、
愚痴っぽく聞こえて、読み飛ばしていたかもしれない。乾
いているってことが、格好いいことだと思っていた。時を
経てから出会ったことで、ぴたりとはまるってこともある
のだな、と、今になって小さく気づいた。

それからさらに時を経て、「たわけた恋だ」と詠んだ
彼の心情を慮る。生々しい感情の吐露であったかもしれな
い句。口をあけた柘榴、そこからのぞく赤い赤い果肉が、
彼の痛みのように見えた。やつぱり格好いい句だと思っ

*1 「特産果樹生産動態等調査」 長期累年、特産果樹生産
出荷実績調査累年統計、かんきつ類以外の果樹【落葉果樹】
（農林水産省）

*2 村松昇「ザクロの特徴と日本におけるザクロ栽培の歴
史について」『農業および園芸』90巻1号、pp.12-17、2015.1

*3 上野千鶴子『上野千鶴子が文学を社会学する』朝日新
聞社、2003.11



イラスト あきの素生

独り言オノマトペ



ドラメリア

(座敷わらし)

同室の先輩Aさんは独り言が多い。普段隣室で作業をすることが多いわたしはあまり至近距離では聞かないが、ガラスを隔てた背後から「つらっ、もう本当にツライ！」などとかかなりの音量で呟きが漏れてくるので、なるほど予定外の仕事で立て込んでいるのね、と内容から本日の様子を推し量る。二人きりの空間ではつきり話されるので、最初は「自分に向けて言っているのか、返事が必要なのだろうか」とまごまごしたものだ。

「いやあ多いですよ、独り言。でも気にせず聞き流していきましよう」と同室のもう一人の先輩Bさんは笑う。学究肌の穏やかなBさんは着席して仕事をする間じゆう真横でそれを浴びているわけで、たしかに右から左へ聞き流さないと気になってしょうがないだろう。

こう書くと迷惑しているのだと思われそうだが、そんなこともない。Aさんは独特のオノマトペを使うことが多く、たとえば「(ドラメリアさん)、用事が終わってからもっ

ちりもつちり来たらいよいよなどとおっしゃる。もつちりつてこういう使い方だっけ？ わたしはパンなのか？ と思ったりするが、独り言にもそのユニークな感じがよく表れていて、聞いていると一周回って楽しい。わたし史上最高のヒットは「しゃかしゃかしゃかしゃか！」で、わりと頻繁に登場しているこれは、この文字のまま本当に口に出しておられて、察するにきびきびと自分比最高の効率で動きたい……動かねばならないときに口をつくようだ。セルフ効果音のようなものだろうか。自分でも使ってみたがなかなか機会がないなと思っている……が、実は無意識のうちにしゃかしゃか呟いているのかもしれない。



・編集後記……

十月半ばまで半袖で過ごしていたのに、あつという間にあつたかインナーのフル装備が必要な気温に。まだ衣替えが追いついていません。 ドラメリア(編集長)

来年一月、三砂慶明さんの『千年の読書―人生を変える本との出会い』誠文堂新光社が刊行される。梅田 蔦屋書店 人文コンシェルジュ。「読書の学校」の活動から生まれた本だ。楽しみます。 奈良敏行(発行人)